様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ９ 月　 ４ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１３２１８

研究課題名（和文）低学年児童における保護者による学習支援の実態把握と低学力の改善に関する研究

研究課題名（英文）Analysis of the Current Status and Issues of Parental Suppport for Children's Learning in the Early Grades

研究代表者
亀山　友理子（Kameyama, Yuriko）

早稲田大学・地域・地域間研究機構・その他（招聘研究員）

研究者番号：１０７４７３１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：カンボジアを事例国として、保護者の学習支援活動の具体的な行動、資本、子供の学習環境や意欲と学力の関係について解明することを目的とした。
　カンボジア国4州において、小学校学校長、教員、保護者及び第3学年の児童を対象とした質問紙調査、インタビュー、及び児童の算数及びクメール語の学力テストにより定量・定性データを収集した。保護者による多くの支援活動が、学力とは正の関係にあり、特に「類似問題をやらせる」「宿題のチェックや答え合わせ」が一番関係が高かった。また児童の視点から「勉強の方法を教える」、「努力を誉める」は学力と正の関係にあるが、反対に「プレッシャーを与える」は負の関係にあることが分かった。

研究成果の概要（英文）：This study investigates the mechanisms of parental actions to support children's learning, parental resources, and children’s learning achievement in the case of a developing country, Cambodia.
Based on the data collected by the survey on 3rd grade students, their parents, school directors and teachers as well as math and Khmer tests on the 3rd grade students in 4 provinces, the preliminary analysis found that most parental supports had significantly positive correlations with the scores. The supports,"ask if homework is done", "help homework", "check if the answers are correct", had significantly positive correlations with the test scores, and particularly, "give similar problems" and "correct homework answers" had high coefficient. Regarding parental supports perceived by students,"teach how to study","talk about importance of learning" and "praise efforts" had significantly positive correlations with the test scores, but"give pressure" had negative correlations with the scores.

研究分野：国際協力教育

キーワード：学習到達度　学力　途上国　国際教育開発　保護者　非認知　カンボジア

１．研究開始当初の背景

近年、国際数学・理科教育動向調査（TIMSS）や学習到達度調査（PISA）に途上国が参加するようになり、途上国の平均的な低学力の問題が顕著になった。また、50 か国以上で実施されている Early Grade Reading Assessment (EGRA)調査により、既に初等教育の低学年時から基礎学力を習得できていない児童が多数いることが判明し、中途退学へ繋がっていると懸念されている（UNESCO 2014)。カンボジアにおける読解力プログラム介入前の EGRA 調査結果では、第 2 学年児童の 65%(2010)に読解力がないことが判明している（Puthy 2014,23)。低学年からの学力格差は高学年になるに従い拡大し（e.g., Paxson and Schady 2005)、低学力児童は小学校課程修了前に、基礎学力を身に付けずに中途退学してしまうリスクが高い（UNESCO 2014)。学力格差及び中途退学の対策として、低学年時期における学力改善を目標とした介入は、教育的且つ費用的にも非常に有効であるとされている（UNESCO 2010)。

学力の決定要因は、学校や教員、家庭環境であると了知されている(e.g., Baker et al. 2002)。途上国における研究では、教育提供側の分析に集中し(e.g., Bruns et al. 2011)、家庭における学習支援については、その制御変数として「教員との情報共有」、「宿題の有無の確認」程度の検証に留まり、詳細が把握されていない。

先進国の研究においては、社会関係資本（e.g., 志水 2012）、経済資本（e.g., Bronfenbrenner 1986）、文化資本(e.g., Bourdieu 1986)の観点から、子供の学力は保護者の資本と相関するとされている（e.g., Epstein 2001)。同時に低学歴等資本が少ない保護者は、家庭における学習支援活動が困難であるとの指摘（Lareau 1987)、逆に保護者の関わり方によって、不利な家庭の児童でも学力向上の可能性があると指摘(垂見 2014)、保護者の学習支援活動は、強力だが未開発な資源だとする（e.g., Weiss et al. 2009）研究もある。途上国において、低学年時からの基礎学力の欠落が懸念される現況において、保護者の学習支援活動を資源として、その有効活用を見据えた実証的な研究が早急に求められる。

本研究では、国の教育戦略計画（2014－2018）(Kingdom of Cambodia 2014)において、教育の質の改善を目標に掲げるカンボジアを事例国とする。カンボジアは、国の初等教育の就学率（純就学率98.3%、2012年）[1]が完全普及とされる数値に達した。しかし実際には純出席率は84.8%（2010）(National Institute of Statistics, Directorate General for Health, and ICF Macro 2010, 14)、第6学年進級時残存率（2009/10）は 61%（USAID 2011,15）等、教育の質の課題が残されており[2]、初等教育の質の改善が急務である。カンボジアを対象とした学習到達度に関する先行研究においては、教員の質（Marshall and et al. 2009)、児童の特性（Chhinh 2003）等、他国の事例研究においても蓄積の多い部分に焦点を当てた研究はされている。また保護者の参加（Nguon 2012）に関する論文もあるが、保護者からの学習の奨励程度の変数に留まり、詳細な学習支援の具体的方法及びその資源について調査した研究はない。

２．研究の目的

本研究の目的は、途上国における保護者の具体的な学習支援について詳細を明らかにし、学習成果との関係及び有効な支援活動について解明するものである。近年、数々の国際規模の学習到達度調査により、途上国における低学年からの低学力が問題となっている。途上国の学習成果に関しては、学校・教員の質、家庭の社会経済状況が強く関連するとした研究が多く存在する。一方、保護者による詳細な学習支援に関する学術的蓄積については、特に途上国においては僅少である。保護者の学習支援活動は、学習成果向上における潜在的資源として可能性を有しているが、途上国では体系化されておらず、個々の慣習と献身に委ねられている現況である。本研究の成果は、国際教育開発の研究に資すると共

---

[1] 初等教育の純就学率及び前期中等教育の純就学率（脚注２）は、下記より出典。World Bank, Education Statistics, http://data.worldbank.org/data-catalog/ed-stats

[2] 前期中等教育の純就学率も 40.0% (2012)と低く、教育戦略計画には初等教育修了率を改善し、中等教育の就学率の向上も含まれている。

に、有益な示唆の導出により、学力格差の衡平に貢献する。

３．研究の方法

本研究は、質問紙調査、学力テスト（算数及びクメール語）及びフォローアップインタビューを行い、収集したデータを分析することにより、研究の質問を解明することとした。

まず学術文献・政府政策文書、その他資料の収集及びレビューを行い、本調査で使用する質問票やインタビューの素案を作成した。またテスト問題については、カンボジア国教育青少年スポーツ省の協力により、年次全国テストの内容を使用することの承認を得た。また、質問紙調査・学力テストにおいては、カンボジアの調査会社を通し、調査員を雇用し、サンプリング、調査手順、質問項目の精査、学力テスト項目の抽出、調査実施、データ入力及び確認の作業を行った。

表１：調査対象者の調査種別とサンプル数

対象者	質問紙調査(学力調査含む)	インタビュー調査
教育局	なし	1名
学校長	44校	3名
教員	72名	5名
児童（3年生）	1107名	10名
保護者	1083名	16名（うち親は7名）
学力テスト	算数　1110名 クメール　1109名	

１）サンプル

調査地域の選択については、既存のカンボジア国マクロデータ（Education Management Information System　2015-16）を活用し、４地域（平原、トンレサップ、沿岸、山沿い）の中から社会経済背景及び学習到達度が代表的であるとされる４州（Kandal, Battambang, Kampot, Stung Treng）を選択し、その中からランダムに各州対象候補校約 10 校ずつ選択した。（各調査のサンプル数は表１を参照）。

２）質問紙調査・学力テスト

文献調査及び既存データ分析の結果を基に、パイロット調査を経て、質問項目、学力テスト項目の予備調査、修正を繰り返し行い、学校長、教員、3 年生児童、児童の保護者（或いはそれに代わる後見人）への質問紙調査を行った。また同時に児童に対しては、算数とクメール語の学力調査を実施した。調査は、学校長、教員、児童については学校にて、保護者は自宅にて実施した。校長及び教員対象の質問項目は、教員の特徴や活動（例、教員歴、宿題の量、保護者との連絡や活動）、学校の特徴や活動（例、家庭学習の支援やシステムの有無、保護者との連絡や活動）である。保護者と児童対象の質問項目は、保護者の直接的学習支援活動、学習環境、児童の学習以外の活動、社会関係資本、経済資本、文化資本、児童の学習意欲等に関する項目である。

３）インタビュー調査

基本的な定量分析がある程度進んだ段階で、質問票では収集不可能である詳細な内容、分析後更に深堀が必要な項目について、インタビューを実施した。対象となる児童及び保護者の選択基準は、同一の教員が担任する学習到達度の高い児童及び低い児童の保護者をほぼ同人数、また、家庭の資源等を考証するため、異なる社会経済状況の保護者を本質問紙調査で得たデータから割出した。父親母親及び児童については、同世帯に属する者を対として対象とする。インタビュー対象の教員については、比較的学習到達度の高い学級、低い学級を基準に選択する。

４．研究成果

主な研究成果としては、a）データベースの構築、b）保護者の具体的な行動と資源等の詳細を分析、c）保護者の学習関与と学習到達度の関係を解析することが挙げられる。

(a) データベースの構築

当初計画には含まれていなかったことではあるが、保護者による児童の学習への関りを測るデータベースを構築し、2 年後には公開することとなった。上記３「研究の方法」にて記述した通り、本研究は質問紙調査・学力テストによって得たデータを解析する手法をとるため、学力テストの結果、学校長、教員、3 年生児童、その保護者の質問票、回答、コードブックがデータベースに含まれる（その数は表１参照。また内容は上記研究の方法２）参照）。

これにより、本研究用の解析を進められるだけでなく、今後他研究者の使用が可能となったことで、多様な視点で児童の学習と家庭の関係について解明されることが期待される。

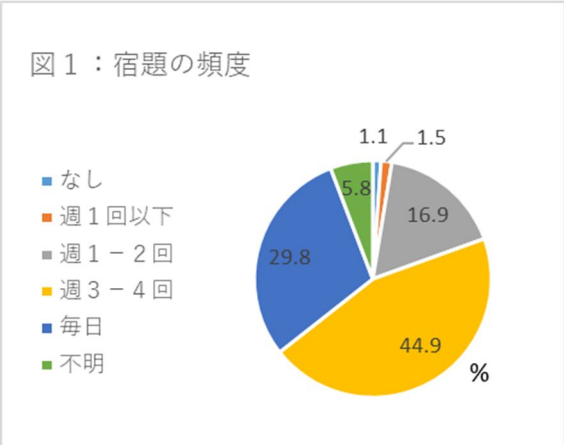
(b) 具体的な行動と資源等の詳細

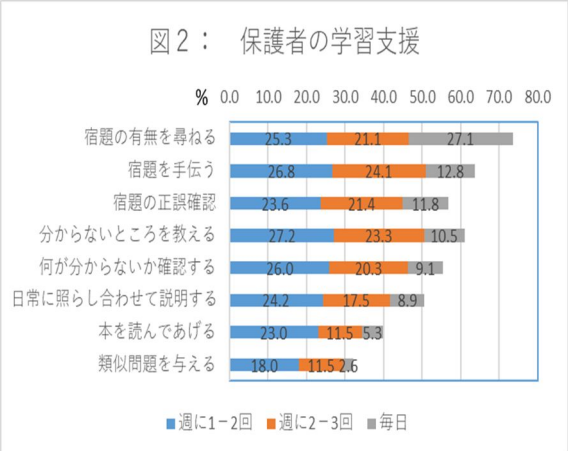
保護者、3 年生児童、学校校長、教員、学習到達度調査のうち、保護者の調査結果は児童のことを一番よく知る大人に回答してもらったが、1,083 名の回答者のうち、母親（54.5%）、父親（17.4%）以外の大人が回答したケースが実父より多い 28.2%あった。また、ほぼ同数の 29%が母親或いは父親のどちらかと一緒に住んでいないと回答している。そのうち父親の場合、59.5%が海外或いは国内の別の場所で仕事をしているために別居していると回答している。このような児童の場合、祖父母が親に代わり児童と一緒に生活している。実際、祖父母が児童を一番よく知るとして回答したケースは、14.9%あった。カンポット州におけるフォローアップインタビューでは、16 世帯に聞き取り調査を行ったが、9 世帯は親が仕事のため同居しておらず、近隣国のタイや首都プノンペンで仕事をしているというケースが見られた。プノンペンで働いている親からは、毎月$10－20 程度の仕送りがあるという世帯もあった。

また、ほとんどが保護者の病気や都合により、扶助を受ける環境であると回答している（94.2%）。インタビューにおいても、近所や親戚との関係の濃さが見られ、病気などの時、近くに住んでいる親戚等が代わりに面倒をみていると回答している。今後の両親についての詳細な分析が必要であるが、児童への関与は、父親より母親に偏り、また祖父母も大きく関与している危うさがあるが、社会関係資本の弱小は見受けられない傾向である。

次に、児童の授業以外の勉強状況について、93.1%の児童が宿題を行っていると保護者が回答している（図 1）。「宿題がない」（1.1%）、「不明」（5.8%）の回答もある。児童の学校外の学習機会について、対象地域のほとんどの 3 年生は、学校の補習授業、及び英語学習を含む私塾では勉強していない（約 85%）一方、5 時間以上勉強している児童が約 1 割いる。

家庭における保護者の児童の学習への関与における具体的行動について、70%以上の保護者が宿題の有無を尋ねる、60%が宿題を手伝う等、宿題を中心に学習支援を行っていることが分かる（図 2）。





(c) 学習到達度の関係

1107人の児童の算数とクメール語の学力テストを行った結果[3]、算数が全部で17問、平均7.7点、中央値5点、クメール語については、全部で15問、平均6.2点、中央値4点と点数が低かった。算数については、男女差はないが、クメール語については、男子の平均5.9点、女子の平均6.4点で、女子の方が統計的に有意に高い点数となった。高得点者は、年齢適応層の児童（9歳か10歳）のみであっ

[3] テストは、カンボジア国教育・青少年・スポーツ省の協力により、3 学年対象の全国学年末テストを実施した。本調査は、カンボジアの学校年度末の 7～8 月に行われたため、テストの全項目について回答できるはずの内容である。

た。

次に保護者の関わりと学習到達度の関係において、予備分析を行った代表的なものを紹介する。ここでは、保護者の関わり方が子どもの成績と如何なる関係があるかについて、保護者の調査票及び子どもの調査票から分析する。また、保護者が「やっている」と回答した結果を合計し、子どもが保護者に「やってもらっている」と感じた結果をそれぞれ合計したものを使用し、どれだけ実際の成績と相関関係があるのかについて見る。点数は、頻度をそれぞれ 0 点から 4 点まで点数化してその合計を用いている。

表２：保護者の支援活動と学力スコアの関係

	クメール語	算数
宿題の有無を尋ねる	0.1088*	0.0769
宿題を手伝う	0.1019*	0.0806*
宿題の正誤確認	0.1271*	0.1136*
分からないところを教える	0.0706	0.0897*
何が分からないか確認する	0.0661	0.0735
日常に照らし合わせて説明する	有意でない	
類似問題を与える	0.1091*	0.1378*
本を読んであげる	有意でない	

表3：　子どもから見た保護者の関与と学力スコアの関係

子どもから見た保護者の関与	合計スコアとの相関関係
勉強をするよう勧める	0.0550
学校での話を聞く	0.0547
子ども自身を大切にしていることを表現する	有意でない
話を聞き、理解する	0.0499
悩みについて聞いてくる	有意でない
勉強のプレッシャーをかける	-0.1098 *
テストの得点をチェックする	0.0527
今日何の勉強をしたのか聞く	有意でない
どのように勉強をしたらよいか教える	0.0830 *
学ぶことの大切さを教える	0.1263 *
努力を誉める	0.1331 *

まず、それぞれの保護者の支援の形とテストスコアに関する相関係数に関し、子どものテストスコアと関係がない可能性の支援活動は「日常に照らし合わせて説明する」「本をよんであげる」であった。それ以外の支援は全て(支援活動の項目は図 2 参照)正の方向に有意である。（p＜0.01 の場合＊、p＜0.05 の場合数字を記載、p＞0.05 については、統計的に有意でないとし、係数は記載なし。）最も相関が高いと考えられるのは、「類似問題をやらせる」その後に「宿題や勉強のチェックや答え合わせをする」だった。

算数、クメール語それぞれの学力テストの点数における相関係数は表２の通りである。いずれも「宿題の答え合わせなどの確認」の相関係数は他と比較して高かった。また「類似問題をやらせる」は算数で非常に高い関連性があることが示唆される結果であった。

子どもからみた親の関わりと学力テストの結果は表3に示した（p＜0.01の場合＊、p＜0.05の場合数字を記載、p＞0.05については係数は記載なし。）。子どもから見て親がどのように関わっていると「感じるか」とその子どもの学力の結果について、相関関係を分析した。

「大切にしていることを子どもに表現する」「悩みを聞いてくれる」「何を勉強したのかを聞く」は有意でない。一方「勉強するよう勧める」「学校の話を聞く」「話を聞いて理解する」「テストの点数チェック」は10%水準で学力スコアと正の方向に有意である。さらに「どのように勉強したらよいか教えてくれる」「学ぶことの大切さを教える」「努力を誉める」は1%水準で正の方向に有意であった。一方で「勉強のプレッシャー」は1%水準で負の方向に有意である。

この分析から、具体的な勉強のやり方の他、学ぶことの重要性を伝えることは子どもの成績とプラスの関係であることが分かる。また、努力を誉めるなどポジティブな反応も子どもの成績と正比例の関係である。一方、プレッシャーは子どもの学力スコアと負の関係であることが分かった。今後詳細な分析が必要ではあるが、いわゆる「褒めて育てる」「やる気スイッチ」「プレッシャーを感じることなく、関心をもって取り組む」という、子育て本で推奨されている関り方を裏付けた結果であるといえる。

〔主な引用文献〕

Bourdieu, P. 1986. The forms of capital. In J. G. Richardson (Ed.), *Handbook of theory and research for the sociology of education* (pp. 241–258). New York: Greenwood Press.

Bronfenbrenner, U. 1986. Ecology of the Family as a Context for Human Development: Research Perspectives. *Developmental Psychology.* Vol 22, No.6, 723-742.

Chhinh, S. 2003. Effect of Pupil Factor on Mathematics Achievement in Cambodian Urban Primary School. Asia Pacific Education Review.

Vol.4. No.2, 151-160.
Epstein, J. 2001. *School, family, and community partnerships: Preparing educators and improving schools.* Boulder, CO: Westview Press.
Lareau, A. 1987. Social Class Differences in Family-School Relationships: The Importance of Cultural Capital. *Sociology of Education,* Vol.60: 73-85.
Marshall, J. H., U. Chinna., P. Nessay., U.N. Hok., V.Savoeun., S.Tinon., and V.Meung. 2009. Student Achievement and Education Policy in a Period of Rapid Expansion: Assessment Data Evidence From Cambodia. *International Review of Education*, 55: 393-413.
Nguon, S. 2012. Parental Involvement and Students' Achievement in Cambodia: Focusing on Parental Resourcing of Public Schooling. *International Journal of Educational Research*, 53: 213-224.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 2 件）

①亀山友理子　「学力の決め手？」JICA 研究所 BBL.2016 年 7 月 27 日、JICA 研究所。

②Kameyama, Yuriko. 2018. "Analysis of the Current Status and Issues of Parental Support for Children's Learning in the Early Grades", Policy Seminar: Parental Support in Children's Learning in Cambodia. (予定)

〔図書〕（計２件）

① Kameyama, Yuriko. 2018. "Parental Involvement in Learning Achievement: Case from Cambodia". JICA Research Institute Working Paper. (Refereed) (in progress).

② Naito, Tomoe and Yuriko Kameyama. 2018. "Parental Employment and Children's Learning Achievement: Case of Cambodia" JICA Research Institute Working Paper. (Refereed) (in progress).

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

ホームページ

①科研費を活用した研究がスタート：途上国支援への新たな示唆を探る
https://www.jica.go.jp/jica-ri/ja/news/topics/post_208.html

②低学年児童における保護者による学習支援の実態把握と低学力の改善に関する研究：カンボジアを事例に
https://www.jica.go.jp/jica-ri/ja/research/strategies/strategies_20151224-20170331.html

③【JICA-RI フォーカス 第 38 号】亀山友理子研究員に聞く
https://www.jica.go.jp/jica-ri/ja/news/interview/jica-ri_focus_vol38.html

その他

①2018 年 1 月に JICA カンボジア事務所にて、予備分析結果の報告会において、国際協力事業への示唆を行った。

②収集したデータセットは、2 年後 JICA 研究所から公開され、一般にも使用可能となる。

６．研究組織

(1)研究代表者

亀山　友理子（Kameyama, Yuriko）
早稲田大学・地域地域間研究機構　国際教育協力研究所・招聘研究員
研究者番号：10747314

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

垂見　裕子（Tarumi, Yuko）
小泉　高子（Koizumi, Takako）
Seng Bunly
内藤　朋枝（Naito, Tomoe）